

日台関係を考える

——日台断交・真実の戦後史から 読み解く今後の台湾との関係

日台・スポーツ文化推進協会理事長 松本彥彦



私と台湾との関わり

私は20代の頃から今日に至るまで、長期にわたって台湾との交流に深く携わってまいりました。これまでに台湾を訪問した回数は200回を超えており、周囲からは冗談交じりに「何か特別な運び屋でもしているのではないか」と言われることもありましたが、私はその言葉を否定せず、「日本と台湾の間の友情を運んでいるのだ」と答えてまいりました。私自身年齢を重ねる中で人生を振り返ってみると、いつ

のまにか台湾との交流は私のライフワークになっていったといえるでしょう。最近も、春節を目前に控えて歳末の独特な風情が漂う台湾を訪れる機会がありました。今回はこれまでに足を運んだことのない場所へ行きたいと考え、大学時代の友人を誘って、台湾の離島である馬祖島へと向かいました。島の高台にのぼると、わずか十数キロ先に中国大陸の街並みをはっきりと望むことができます。廈門からわずか数キロしか離れていない金門島と同様に、馬祖もまた大陸と対峙する最前線であることを強く実感させられる場所

でした。翌日の朝になると前日の好天から一変して濃霧に包まれ、急遽フェリーでの帰還を余儀なくされました。強烈な台湾海峡の冬の荒波にもまれ基隆港に着いたのは8時間半後で、鮮烈な思い出となりました。

戦前の日本による台湾統治の歴史

日本と台湾の現在をより深く理解するためには、両者が共有してきた複雑で数奇な歴史の歩みを振り返る必要があります。1894年に勃発した日清戦争は日本の勝利に終わり、翌189

5年に山口県下関の春帆楼において、日本側全権の伊藤博文と清国側全権の李鴻章との間で講和条約（下関条約、中国側呼称は馬関条約）が締結され、台湾は日本に割譲されました。ここから1945年の終戦に至るまでの50年間、日本による台湾統治が行われました。台北の中心部に建設された壮麗な総督府（現在の総統府）を拠点として、初代総督の樺山資紀をはじめ、桂太郎、乃木希典、児玉源太郎といった日本近代史に名を残す錚々たる軍人・政治家が台湾の統治にあたりました。特に第4代総督である児玉源太郎の下で民政長官を務めた後藤新平の功績は極めて大きく、彼は鉄道網の敷設、近代的な病院の建設、上下水道の整備、ダム建設による水力発電や灌漑など、台湾のインフラストラクチャー整備に全身全霊を傾けました。彼らが台湾の民生向上のために築き上げたインフラの多くは、驚くべきことに現在でも有効に活用されており、これが台湾の人々が日本に対して強い親愛の情を抱く大きな理由の一つとなっているとい

えましよう。もちろん、この50年間の統治が常に平穩無事であったわけではなく、時折激しい抗日暴動も発生しました。その最も悲惨で最大規模のものが、1930年に発生した「霧社事件」です。この事件については後ほど詳しく触れますが、そうした悲劇的な歴史を内包しながらも、日台の歴史は深く交錯してきました。時代が下り、1937年には北京郊外の永定河にかかる石造りの見事な橋で知られる盧溝橋において日中両軍が衝突し、全面的な日中戦争へと突入しました。この困難に際し、それまで激しく対立していた毛沢東率いる中国共産党と蒋介石率いる中国国民党は「国共合作」を結び、抗日統一戦線を形成しました。しかし、1945年に日本が敗戦を迎えると、戦勝国となった中国大陆で再び国共内戦が勃発し、最終的に敗れた蒋介石率いる国民党軍は台湾への撤退を余儀なくされました。

戦後の国民党による統治を経て

日本の統治が終わりを告げ、新たに中国大陆から国民党政権が進駐してきた戦後の台湾において、極めて悲劇的な事件が発生しました。それが1947年の「2・28事件」です。日本統治時代から台湾に住んでいた人々（本省人）は、当初は祖国復帰として国民党軍を歓迎しましたが、陳儀行政長官の下での腐敗や弾圧に不満を募らせてきました。そして闇タバコを販売していた女性が官憲に摘発され暴行を受けたことを発端として、2月28日、全島規模の抗議運動が勃発しました。事態の収拾が困難になった陳儀は大陸の蒋介石に軍隊の派遣を要請し、上陸した国民党軍は台湾の知識人や若者を中心に次々と武力弾圧し、殺害しました。正確な犠牲者数は現在でも不明ですが、一般的には数万人規模の尊い命が奪われたと言われています。この惨劇を契機として、古くからの台湾住民である「本省人」と、戦後に大陸から渡ってきた「外省人」との間に、深く暗い溝が刻まれることになりました。「本省人の子どもとは遊ばせない」「恋

愛や結婚などもってのほか」という激しい対立の時代が長く続きました。私が台湾との交流を始めた頃もその傷跡は深く残っていました。現在では世代が3代、4代と移り変わり、「祖父は外省人、祖母は本省人」といった若者が多数を占めるようになり、かつてのような強烈な分断は徐々に薄れつつあります。しかし、政治的な支持基盤としては、依然として本省人の多くが

民主進歩党（民進党）を支持し、外省人の系譜を引く人々が国民党を支持するという傾向が残っています。かつて「反共」の旗手であった国民党が、現在では比較的親中寄りの路線をとっているように見えることは、歴史の皮肉を感じざるをえません。蒋介石や蔣経

国は、いつの日か大陸を取り戻すという「反攻大陸」の悲願を抱き、遺体が大陸の土に帰る日を待ち望んで、その棺を完全に土中に埋葬せず安置室に浮かせるように置いているほどでした。彼らが主張した「一つの中国」とは、共産党が支配する中国ではなく、「自由と民主主義を奉じる中華民国が全中

国を代表する」という強い矜持に裏打ちされたものでした。

歴代の総統の系譜をたどると、蒋介石の没後は敵家淦が後を継ぎ、その後は蒋介石の長男である蔣経国が総統に就任しました。蔣経国が1988年に世を去った後、台湾出身の本省人として初めて李登輝が総統の座に就き、台湾の民主化を決定的に推し進めました。その後は民進党の陳水扁、国民党の馬英九、民進党の蔡英文、そして現在の頼清徳へと政権交代が繰り返され、台湾は成熟した民主主義社会を見事に構築しました。

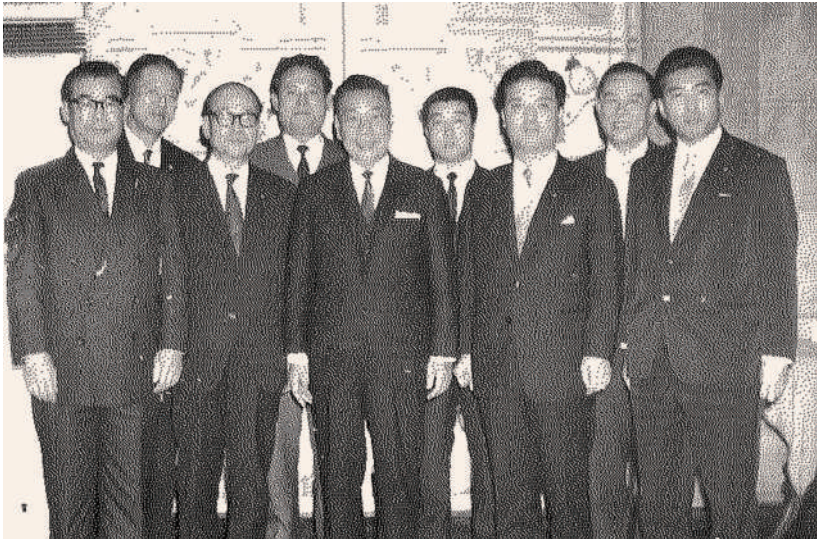
日華平和条約の締結と終焉

さて、戦後の日本と台湾の外交関係に目を向けますと、1951年にサンフランシスコで対日講和条約が締結された際、1949年に誕生した中華人民共和国と中華民国のどちらを中国の正統な代表として招くかが国際的な大問題となり、結果としてどちらも講和会議には招かれませんでした。アメリカ

カからその後の判断を委ねられた当時の吉田茂総理は、最終的に中華民国（台湾）を交渉相手として選び、19

52年に日華平和条約を締結しました。吉田総理がこの重大な決断を下した背景にはいくつかの理由がありましたが、大きな要因の一つは蒋介石総統に対する深い恩義でした。終戦直後、中国大陆には膨大な数の日本人軍民が取り残され、報復の恐怖に怯えていました。しかし蒋介石は、「怨みに報いるに徳を以てせよ（以德報怨）」という有名な声明を発表し、日本軍の暴挙を非難しつつも日本人への報復を厳しく禁じ、多くの日本人が無事に祖国へと帰還できるよう多大な配慮を示したのです。この寛大な措置がなければ、どれほど多くの日本人が大陸で命を落としていたか計り知れません。

しかし、歴史の歯車は冷酷に回り始めます。1971年の国連総会において、「広大な国土と膨大な人口を抱える中華人民共和国こそが中国の正当な代表である」と主張するアルバニア決議案が可決されました。それを見込ん



写真① 蔣経国国防部長（前列中央）来日（1967年）

だ中華民國代表は席を立ててしまいました。この結果、中国の代表は中華民國から中華人民共和国へと代わり、安全保障理事会の常任理事国の座も北京政府へと移ってしまいました。民主主義のルールとはいえ、台湾にとってはあまりにも過酷な現実でした。

この激動の時代、私は東京都の職員を経て自民党の青年局で活動していました。都の職員のと看、分断されたベルリンを訪問し、東ベルリン入りを敢行した経験から、自由というものが人間にとってどれほど尊いものであるかを痛烈に実感し、自由主義社会を守るための政治活動に身を投じたのです。当時の自民党青年局には、海部俊樹氏、小淵恵三氏、橋本龍太郎氏など、後に日本の総理大臣となる錚々たる若手政治家たちが在籍しており、私も彼らと切磋琢磨しながら青年部活動に邁進しました。その最中、佐藤栄作総理から「将来の日台関係を見据え、青年局として台湾との青年交流を推進しなさい」との特命を受け、私は実務責任者として台湾との交流を開始しました。1972年の春、私は当時の台湾の実力者であった蔣経国氏（当時は行政院副院長）と直接面会する機会に恵まれました。軍や警



写真② 台湾行政院にて。左は蔣経国行政院副院長、右は筆者（1972年3月）

察を掌握する冷徹な指導者という世間のイメージとは異なり、蔣経国氏は非常に温和で理知的な人物でした。彼は私に対し、「国家の存亡という危機はどの国にも起こりうる。最も重要な

は、国民が心一つにして国を守ろうとする強固な意志があるかどうかだ。容易に外圧によって左右されることはない。台湾の内部にある本省人と外省人の対立を乗り越え、国民を団結させなければこの国は持たない」と、国家指導者としての深い苦悩と決意を語ってくれました。実際、彼は後に李登輝氏を抜擢して農政担当大臣に任命し、自らもジャンパー姿でヘリコプターに乗り込み、台湾全土の農村や漁村を精力的に視察して回りました。こうした地に足が着いた活動を継続して行うことにより、蔣経国氏は本省人を中心とする民衆の心をつかみ、国民の団結を図ることに成功したのです。

日台断交の政治決断

そして運命の1972年秋を迎えます。7月に田中角栄内閣が誕生し、日中国交正常化という歴史的な大事業が動きだしました。大平正芳外務大臣は、中国と交渉を始める前に、長年友好的な関係を築いてきた台湾に対して

誠意を尽くし、政府特使を派遣して事情を説明しなければならぬと苦心していました。しかし、日本の動きを察知していた台湾側は特使の受け入れを強硬に拒絶していました。この膠着状態を打開するため、大平外相は、台湾との太いパイプを持つ人物を探し求めています。当時、自民党の役職に就いていた石田博英氏の元で働いていた私に白羽の矢が立ち、台湾の最高幹部であり蔣介石総統の最も信頼する片腕であった張群氏（総統府資政）との折衝という極秘任務を帯びて、台北へと飛ぶことになりました。9月10日に台北の日本大使館で宇山厚大使と打ち合わせを行い、12日に張群氏との会談に臨みました。私のような若輩者が国の特使受け入れを直接要請するなど到底できることはありません。私は張群氏に対し、「私たちが築き上げてきた日台の青年交流を、このような政治的難局によって断絶させたくはありません。どうか大局的な見地から、両国が喧嘩別れにならないようご配慮いただけないでしょうか」と必死に訴えまし

た。張群氏は私の言葉に静かに耳を傾け、自らの日本留学時代の思い出や日本の若者との交流の記憶を日本語で語ってください、非常に温かい感触を得て会談を終えました。驚くべきことに、その翌日には台湾外交部から宇山大使に「日本政府特使の受け入れを了承する」と告げられたのです。後になって、この決定の背後には、青年交流を通じて私たちを評価してくれていた蔣経国氏の強い後押しがあったことを知りました。

椎名特使の派遣

こうして9月17日、自民党副総裁である椎名悦三郎氏を特使とする政府代表団が台湾に到着しました。しかし、台北の松山空港には特使派遣に激怒する台湾の群衆が押し寄せ、ものすごい数のプラカードやのぼりが翻る異様な熱気に包まれていました。日本の右翼団体も抗議活動に加わり、現場は厳重な警戒態勢が敷かれていました。特使一行を乗せた車列が空港のゲートを出

た瞬間、群衆が殺到し、私が乗っていた車のガラスも叩き割られるという恐ろしい事態となりました。私と浜田幸一代議士らは、ガラスの破片を浴びながらもじっと耐え、一行が宿泊する圓山大飯店へと向かいました。ホテルに到着後、特使一行が集まり、これからの台湾側との困難な交渉に向けて意見交換を行いました。翌朝には日本の右翼団体がホテルまで乗り込んできて抗議の巻物を読み上げるなど、現場は一触即発の緊迫した空気に包まれていました。最終的に椎名特使は、「日台の外交関係は今後も維持・継続していく」という見解を明らかにしたのです。この言葉によって、台湾側の関係者も安堵の表情を浮かべ、最悪の「喧嘩別れ」だけは回避することができたのです。ところが9月25日から田中角栄総理一行が訪中し、9月29日、北京で日中共同声明が署名され、日本と中国の国交が正常化されると同時に、日本と中華民国の正式な外交関係は断絶

しました。その日の夜、私は台北からの断交声明の報道を見つめながら、私を温かく迎えてくれた張群氏や台湾の友人たちへの申し訳なさで胸がいっぱいになり、飲めない酒を飲みながら、一晩中涙を流して過ごしました。「これからどのような人生を歩むにせよ、私は生涯を通じて台湾との交流を促進



写真③ 椎名悦三郎特使（左）張群資政（中央）

し、両国の絆を守り抜く仕事に身を捧げよう」と、弱冠32歳であった私はその夜、固く心に誓ったのです。

桜の植樹・各種活動

時は流れ、2011年に東日本大震災が発生した際、台湾からは早く、世界最大規模となる莫大な義援金と心温まる支援物資が日本に届けられました。日本中が台湾の深い友情に感動しましたが、当時の日本政府の対応に一部非礼と受け取られかねない事態があり、私は民間レベルで台湾の人々に直接感謝の気持ちを伝えるための行動を起こす決意をしました。仲間と相談し、日本列島の最西端である沖縄の与那国島から、台湾の東海岸へと海を泳いで、岩手・宮城・福島三県の知事から台湾への感謝のメッセージを直接届けるという壮大な遠泳企画を立ち上げました。サメが生息し、黒潮の激しい海流と3メートルもの大うねりがうずまく危険な海域でしたが、選りすぐりの6人の若きスイマーたちが見事に



写真④ 黒潮泳断チャレンジ 東日本大震災義援金250億円超+義援物資

泳ぎ切り、台湾の蘇澳スアオの港にたどり着いた時の感動は筆舌に尽くしがたいものがありました。この出来事は日台双方のメディアで大々的に報じられ、台湾への感謝の気持ちを伝えるという目的は達することができました。

さらに翌2012年には、台湾南部

の烏山頭ウサントウダムを訪問しました。このダムは、日本統治時代に日本人技師の八田與一が10年の歳月をかけて完成させた当時東洋一の規模を誇るダムであり、かつて不毛の地であった嘉南平原を台湾有数の穀倉地帯へと生まれ変わらせた奇跡のインフラです。現在でも国立公園として美しく整備されているこの地において、私は日台友好の証として「絆の桜」を植樹するプロジェクト「日台黒潮泳断チャレンジ」を企画しました。八田技師と同郷石川県出身の森喜朗元総理大臣にもご同行いただき、現地の皆様とともに和やかな植樹式を執り行いました。

日本と台湾の歴史の中には、目を背けてはならない悲劇も存在します。1930年に台湾中部の山岳地帯、現在の南投県仁愛郷じんあいこうで発生した「霧社事件」です。先住民であるセデック族の



写真⑤ 烏山頭ダム

伝統的な文化や風習（首狩りの風習など）を日本が強制的に近代化・同化させようとしたことに対する不満が爆発し、小学校で行われようとしていた運動会を先住民の若者たちが襲撃し、137名の日本人が惨殺されるという凄



写真⑥ 花岡兄弟が自死した場所を説明するセデック族老婆

惨な事件でした。日本側は徹底的な武力鎮圧を行い、多くの先住民が命を落としました。その数は約1000名ともいわれています。私はこの悲劇の地を何度も訪れ、犠牲となった双方の御霊を慰めるために仁愛郷と共催で桜の

植樹と平和友好の式典を執り行いました。この事件で特筆すべきは、日本式の教育を受け、日本の警察官として勤務しながら、血を分けた部族との間で板挟みとなり、壮絶な自死を遂げた花岡一郎と花岡二郎という二人の若者の存在です。日本の文献では「武士道精神に則り切腹と首吊りをした」と美化して語られがちですが、現地の遺族や長老から直接話を伺うと、真実は異なり、彼らは先住民としての誇りと葛藤の中で命を絶つたという事実を知らされました。式典の最後には、先住民の婦人代表の方から「私たちは日本を恨んでばかりいるわけではありません。日本時代に教わった『東京音頭』を今でも大切に受け継いでいます」と声をかけられ、皆で輪になって東京音頭を踊りながら涙を流して交流を深めたことは、私の人生における宝物です。また、私はスポーツを通じた日台交流を深めようと、毎年10万人



写真⑦ 東京音頭でフィナーレ

以上が参加する盛大な台北マラソンに「日台友好マラソン」と銘打って日本のランナーの参加を呼びかけました。この時には日本の著名な指導者である瀬古利彦氏や、箱根駅伝の解説でお馴染みの碓井哲雄氏（故人）らにも協力をいただき、現地で素晴らしい交流の場を持つことができました。さらに、日本時代の1931年に甲



写真⑧ 瀬古利彦氏（左）、碓井哲雄氏（右）と筆者（中央）

平和を祈り続けてまいりました。

東アジアの平和と安定を願って

ここまで台湾を中心に論じてきましたが、もちろん、私の活動は台湾に限定されたものではなく、中国大陆の天台宗の古刹を訪ねて文化人や書家たちと深い芸術交流を行ったり、遠く新疆ウイグル自治区まで足を運んで現地の多様な民族文化に触れたりもしてきました。南京での桜の植樹活動も行い、日中間の友好活動にも尽力して参りました。

子園で準優勝を果たした嘉義農林学校の野球部の活躍を描いた映画『KANON』の舞台となった嘉義を訪れたり、太平洋戦争末期にバシー海峡で撃沈された日本の輸送船の数万の英霊を祀るため、有志と台湾最南端の潮音寺で慰霊の行事を行ったりと、私は台湾各地で日台の歴史を直視し、その友好と

た。もちろん私は中国の悠久の歴史や文化を深く敬愛していますし、その思いは今も変わることがありません。同時に、私は今後も、自由と民主主義という人類普遍の価値観を共有する台湾との揺るぎない連帯を一層深めながら、東アジア全体の平和と安定のため、自分にできる草の根の交流活動を

命の続く限り全うしていく覚悟です。
(2026年2月26日講演)

※本稿は松本或彦氏の講演を国際善隣協会会員・松葉敏弥がまとめたものです。

筆者略歴（まつもと・あやひこ）

1939年、東京生まれ。1963年、中央大学法学部卒業。東京都職員を経て、自由民主党本部（青年局、幹事長室）勤務。1967年、日華青年親善協会事務局局長就任、台湾との交流を始める。1972年、椎名悦三郎特使秘書として台湾派遣交渉にあたる。2005年、日台スポーツ文化推進協会設立、理事長。

2007年、中国南京市郊外の「和平友好桜花園」建設に関わり、8000本の桜を植樹。2011年、中華民国政府より「外交奨章」授与（日本人初）。東日本大震災に対する台湾からの支援に感謝して「日台黒潮泳断チャレンジ」を企画、実行委員長。